

## 旧草津川における「公共性」に関する研究

-天井川跡地活用状況調査を通して-

### A Study on the Publicness at Former River Kusatsu -Through Researching Situation of Utilization of Former Raised Bed River-

建築デザイン分野 植野靖隆

旧草津川は、草津市市街地を南北に分断する程広大な天井川跡地である。この天井川跡地では、周辺住民による活発な公共的活用が行われているが、市の政策により平地化されようとしている。その天井川跡地におけるすべての活用事例を記録するとともに分析を行った。発見された161件の対象事例を15個のグループに分類するとともに、旧草津川が公共性を獲得している要因やその要因と活用の形態との関係性、活用事例の配置状況における特徴を解明した。

Former river Kusatsu is former raised bed river. It is so big as to it divides kusatsu city in north and south. Neighborhoods utilize this former river but city's policy decide to broke this. So I recorded and analyzed all situation of utilization of former raised bed river. I found 161 cases. And I classified it to 15 groups. I unraveled the primary factor of the reason of former river kusatsu gets publicness and the relationship between it and the form of utilization, the special feature of the allocation of the case of utilization.

#### 1. 研究の目的と方法ならびに既往の研究

##### 1.1. はじめに

###### ■研究の背景

旧草津川はかつて世界的に著名な天井川であった。草津市市街地を南北に分断するように流れており、その川床は、市街地で平地より5~6m、堤防までで9~11mの高低差を有していた。このため、JRや国道などの主要な交通機関は、旧草津川を横断する手段として河床下にトンネルを通して作られている。旧草津川は天井川であることから、堤防決壊時には、大きな被害を与えることとなってきた。このため、治水の目的で2002年3月に上流の金勝川合流点で新しい草津川放水路に通水が始まり、旧草津川は廃川となった。現在、市街地を南北に分断する程広大な堤防跡だけが残されている。治水の面から天井川が工事されることは多々見られるが、それらの多くは河床を下げるにより治水がなされており、新しく通水路をつくり、市街地をまたぐ程広大な範囲に堤防跡が独立して残ることとなったのは、国内で旧草津川だけである。

草津市は旧草津川と密接に関わりながら、形成されており、市街地の成り立ちには、草津川による影響が垣間見られる。また、市街地の中に広大に存在し、特

異な形態である旧草津川は、周辺住民の生活とも密接に関わっている。現在廃川となり、洪水の危険性が無い旧草津川の堤防斜面では、他では見られない程活発な公共的な活用が見られ、貴重なオープンスペースとしての価値を有している。しかし、現在、市の政策により堤防跡は取り除かれ、平地化されようとしている。

現在、失われゆく旧草津川の活用状況調査を通して、現在の旧草津川を記録保存するとともに分析を行い、今後の可能性を考察したいと考える。

###### ■研究の目的

本論文では、現在取り壊しが決定されている旧草津川において、現在の堤防跡地の活用状況を記録することを一つの意義としている。そして、それらのことを分析することにより、旧草津川が有する「公共性」の要因や特徴を解明することを目的としている。

また、旧草津川と人々の関わり方を示し、旧草津川が有する公共性を考察することは、市街地における公共性や市街地における堤防空間利用の可能性、市街地における緑地帯と人々の生活との関わり方、既存の環境を有効に生かす方法を考察する一役としての意義も有している。

#### 2. 既往の研究と本論文の位置付け

旧草津川を調査した研究には、工学的に実測調査したものや、天井川化の歴史を扱った研究がある。草津市の天井川の断面を実測調査している研究には、小林健太郎らの「滋賀県草津市の天井川」がある。天井川化の歴史を扱ったものには、村上康蔵による「草津川の天井川化に関する研究—江戸時代の絵図による」がある。旧草津川において、廃川後の公共的利用に言及している研究はなされていない。

本論文は、公共空間の利用に関する調査として位置づけられ、旧草津川において、公共的な空間利用に関して調査を行うことに独自性がある。

### 1.3. 研究の方法

本論文では、旧草津川を調査対象とする。実際に旧草津川において、行われている行為や起こっている現象を対象とするために、フィールドワークによって、旧草津川を調査した。その際以下の2種を調査対象とした。

- ・旧草津川敷地内に存在するすべての構築物
- ・旧草津川敷地内で起こっている人による活動

これらの調査対象をすべてチェックし、地図上にプロットした。さらに、発見された調査対象は、同一の行為や構築物毎にグループ分けを行い、整理と分析を行った。

## 2. 草津市及び旧草津川の概要について

### 2.1. 草津市の概要について

草津市は、滋賀県の南部に位置する市。県庁所在地の大津市に次ぐ県下第二の人口を有する都市である。江戸時代には東海道と中山道が接する宿場町(草津宿)として栄えた。近年では、JR東海道本線・草津線、国道1号・名神高速道路・新名神高速道路など日本を東西に結ぶ交通網を有しており、近世から現代にわたって交通の要衝として位置づけられている。

### 2.2. 旧草津川の概要について

かつての草津川は、滋賀県を流れる淀川水系の一級河川であり、天井川であった。滋賀県大津市南東部の鶏冠山を源流とする。その流路の全長は、約15kmに及ぶ。その間天井川化しているのは、約11kmに及び、約73.3%に達している。古文書によると、旧草津川が天井川となったのは江戸時代中頃からとされている。

本論文において、廃川となった従来の草津川流路跡を旧草津川と称する。

## 3. 対象事例の分析

### 3.1. 対処事例の概要と選出

事例の選出にあたって、実際に旧草津川において、行われている行為や起こっている現象を対象とするために、フィールドワークによって調査をした。

その際、1章で前述している以下の2種を調査対象としている。

- ・旧草津川敷地内に存在するすべての構築物
- ・旧草津川敷地内で起こっている人による活動

調査事例の中から、旧草津川との関係性がほとんど無いと言える事例をのぞいた事例を対象事例として、161件の事例が発見された。それらに対して、整理及び分析を行った。

### 3.2. データの整理

探し出した各事例は一つ一つを撮影写真とともにデータシート形式にまとめた。

さらに、重複する活動や構築物の数。配置状況を整理するために、同一の活動や構築物毎にまとめ、グループ毎のデータシート

公共的活用の15分類 (全対象事例161件)	
Group No	類似グループをまとめた名称
A	広場としての利用
B	車道の設置
C	歩道の設置
D	看板の設置
E	堤防上道路へのアクセス路の設置
F	堤防上道路への周辺住民独自のアクセス道の設置
G	園芸の場としての利用
H	耕作地としての利用
I	小屋の設置
J	建築からのブリッジの設置
K	公園の設置
L	橋の設置
M	遮蔽のために利用
N	看板の設置
O	公共もしくは委託管理地

Fig.1

シートを作成した。各グループのデータシートには、活用状況が適切に伝わる写真や写真では伝わりにくい観察対象の特徴を伝えるドローイング、配置図などを記すとともに分析を行った。

そして、それらの事例を地図上にすべてプロットした。

旧草津川が有する公共性を評価するために、旧草津川における公共的活用は何を要因として行われているのかを考える。各事例を考察することにより、旧草津川が公共性を獲得している要因を抽出し、「有機性」・「連続性」・「遮蔽性」・「レベル差」の4つに大別した。これら4つの要因を本論文では、旧草津川の「公共性獲得要因」と名称して扱う。

- ・「有機性」による公共性の獲得について

これは、市街地の中に、広い範囲に自然物を存在させている旧草津川の特徴に起因している。自然の土や植物を活用している事例が観察されている。

- ・「連続性」による公共性の獲得について

旧草津川はかつての天井川であり、堤防跡は障害物が無く、連続的に草津市の東西をつないでいる。こういった特徴から東西をつなぐ交通路として、周辺住民に活用されてきた。

- ・「遮蔽性」による公共性の獲得について

これは、旧草津川の特異な特徴となっている大きな堤防跡によって生じる遮蔽性を利用した公共的活用の事例である。

- ・「レベル差」による公共性の獲得について

レベル差とは堤防跡によって生じる、場所による高さの違いである。

### 3.4. 旧草津川における「公共性獲得要因」の分析

旧草津川における「公共性獲得要因」のグループ毎の分布は Fig.2 のようになった。「連続性」を公共性獲得要因としているグループ事例は、一つのグループ事例以外他の要因を持たず、独立している。「有機性」と「遮蔽性」を公共性獲得要因としている事例は、グループ事例 K を除き、一致している。K は公共事業によりなされたもので、旧草津川上で一つの事例しか見られていないので、「有機性」と「遮蔽性」を「公共性獲得要因」としている事例は酷似していると言える。このことから、「有機性」と「遮蔽性」は、相互に関連して公共性の獲得に寄与していると言える。G「庭としての利用」や H「耕作地としての利用」、I「小屋の置」、M「遮蔽としての利用」は、三つの「公共性獲得要因」を利用している。

これは、旧草津川の持つ特性を上手く利用している事例だと言える。

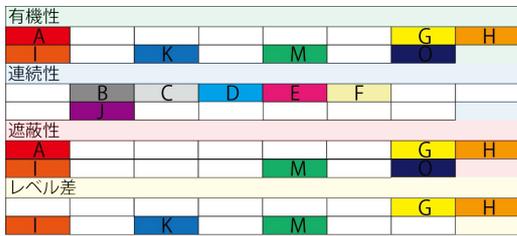


Fig.2

## 4. 空間の活用形態からみる旧草津川における公共的活用

### 4.1. 分析の方法及び目的

第3章において、旧草津川が公共性を獲得する要因について考察した。そこで、「公共性獲得要因」として「有機性」・「連続性」・「遮蔽性」・「レベル差」という4つの要因が抽出された。それら「公共性獲得要因」が、周辺住民に対してどのような影響を有しているかを、それらがどのような行為に結びつくかという観点で分析する。そこで、旧草津川における公共的活用を活用形態という観点で整理、分類することを試みる。その分類と「公共性獲得要因」を照らし合わせることにより、それぞれの「公共性獲得要因」は行為者に対してどのような影響を与えているか分析し、「公共性獲得要因」を通して、旧草津川の公共性に関して考察する。

### 4.2. 旧草津川における活用形態による分類

活用形態を分類するために、「ある特定の空間を占有している」か「ある特定の空間を占有していない」かどうか、また、それらは「一時的な活用」か「継続的な活用」かどうかという観点で、対象事例を4つに分類する。

### 4.3. 活用形態の違いによる旧草津川における公共的活用の分析

前述の活用形態によって分類された4つの活用事例群の特徴について以下に示す。

#### ・「活動」

2軸グラフの右上に位置する対象事例は、「ある特定の空間を占有している」状態で、なおかつ「一時的な活用」のものである。この分類には、旧草津川の一部の空間を占有して行われる一時的な活動が含まれる。

これは、行為者がスポーツアウトドアといった何らかの活動をするために旧草津川を活用している事例である。

#### ・「移動」

2軸グラフの左上に位置する対象事例は、「ある特定の空間を占有していない」状態で、なおかつ「一時的な活用」のものである。この分類には、市民が、空間を占有することなく、一時的に旧草津川を活用する事例として、市民が旧草津川を移動のために活用している事例が含まれる。

#### ・「占有」について

2軸グラフの右下に位置する対象事例は、「ある特定の空間を占有している」状態で、なおかつ「継続的な活用」のものである。この分類には、周辺住民が長期的に旧草津川の一部を活用している事例が含まれる。

この分類は、堤防跡空間が何らかの形によって、行為者によって占有されているものであり、公式に許可されているものや、委託されているもの、不法占拠されているものが含まれている。

#### ・活用形態「視線」について

2軸グラフの左下に位置する対象事例は、「ある特定の空間を占有している」状態で、なおかつ「継続的な活用」のものである。この分類には、旧草津川の一部を占有することなく長期的に活用している事例として、旧草津川の敷地外から、旧草津川を視覚的に活用している事例が含まれる。

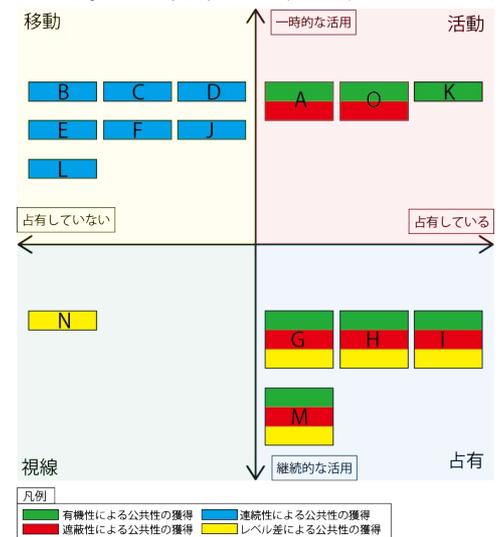


Fig.3

この事例は1事例

しか発見されず、旧草津川ではあまり見られなかった。第3章において「公共性獲得要因」として、「有機性」・「連続性」・「遮蔽性」・「レベル差」という4つの要因を抽出した。そして本章では、対象事例のグループを活用形態によって4つに分けた。「公共性獲得要因」が、市民に対してどのような影響を持つかを考察するため、

それら「公共性獲得要因」が、本章で分類したどの活用形態に結びつくかを分析した。

そのために、作成した2軸グラフ上にある対象事例を、その事例の「公共性獲得要因」が分かるように色分けした Fig.3 を作成した。

■活用形態「活動」における「公共性獲得要因」

グループ事例 A・O の「公共性獲得要因」は共通して「有機性」と「遮蔽性」である。グループ事例 K の「公共性獲得要因」は「有機性」である。「活動」という公共活用は、旧草津川の有する「有機性」と「遮蔽性」という2つの性質を混合して利用するか、「有機性」のみを利用してなされていることが読み取れる。

■活用形態「移動」における「公共性獲得要因」

活用形態「移動」の「公共性獲得要因」はすべて共通して「連続性」である。このことから「移動」という公共活用は、旧草津川の有する「連続性」という性質からなされていることが読み取れる。

■活用形態「移動」における「公共性獲得要因」

グループ事例 G・H・I・M の「公共性獲得要因」は、すべて共通して「有機性」と「遮蔽性」、「レベル差」

の3つの性質である。このことから、「占有」という公共的活用は、旧草津川の有する「有機性」と「遮蔽性」、「レベル差」という3つの性質を混合して利用していることが読み取れる。

■活用形態「視線」における「公共性獲得要因」

グループ事例 N の「公共性獲得要因」は「レベル差」である。このことから、「視線」という公共的活用は、旧草津川の有する「レベル差」という性質を利用していることが読み取れる。

5. 公共的活用の配置状況からみる旧草津川の公共的活用

5.1. 分析の方法及び目的

旧草津川において観察された15のグループ事例を、活用形態という観点からさらに4つに分類した。グループ事例と活用形態に分類した事例をそれぞれ地図上に示し、分析を行った。

5.2. 公共的活用の配置状況

観察された対象事例を、グループ事例毎と活用形態毎にそれぞれ色分けし、地図上に示した。

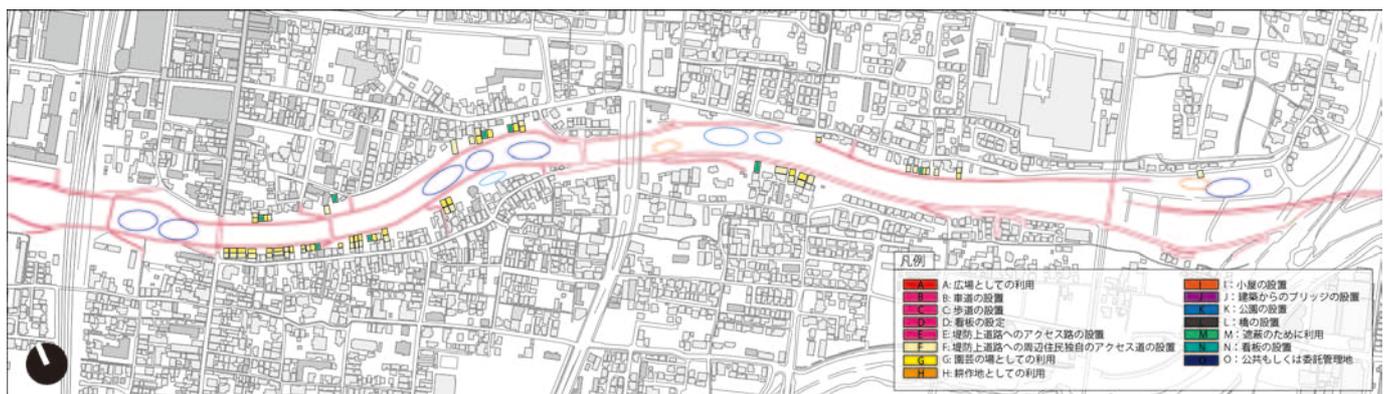


Fig.4 グループ事例毎の公共的活用-区間 4-

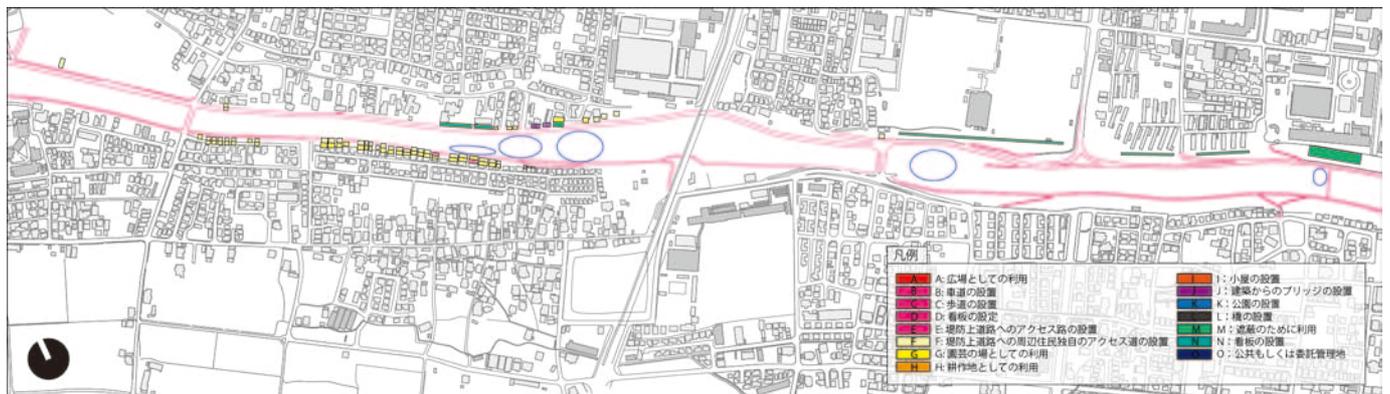


Fig.5 グループ事例毎の公共的活用-区間 3-

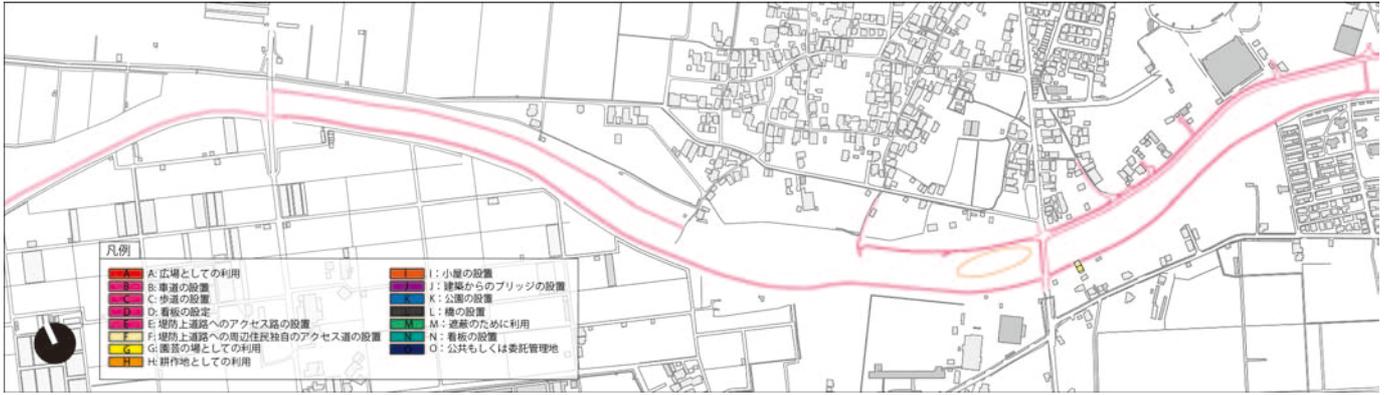


Fig.6 グループ事例毎の公共的活用-区間 2-

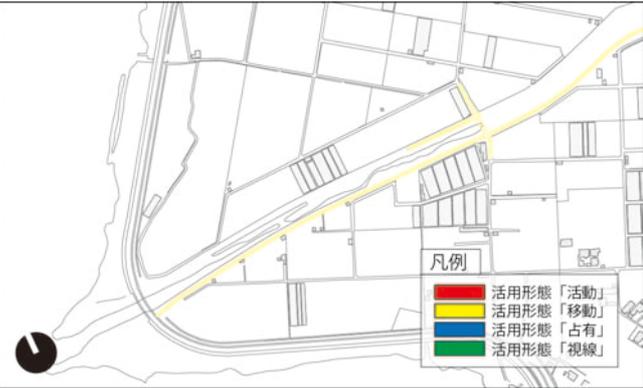


Fig.7 グループ事例毎の公共的活用-区間 1-

Fig.6 活用形態毎の公共的活用-区間 1-

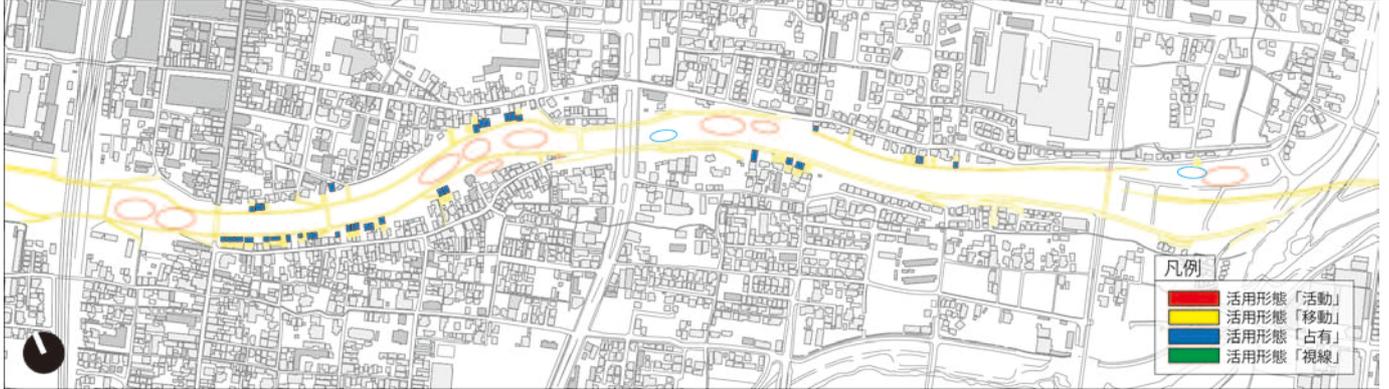


Fig.8 活用形態毎の公共的活用-区間 4-

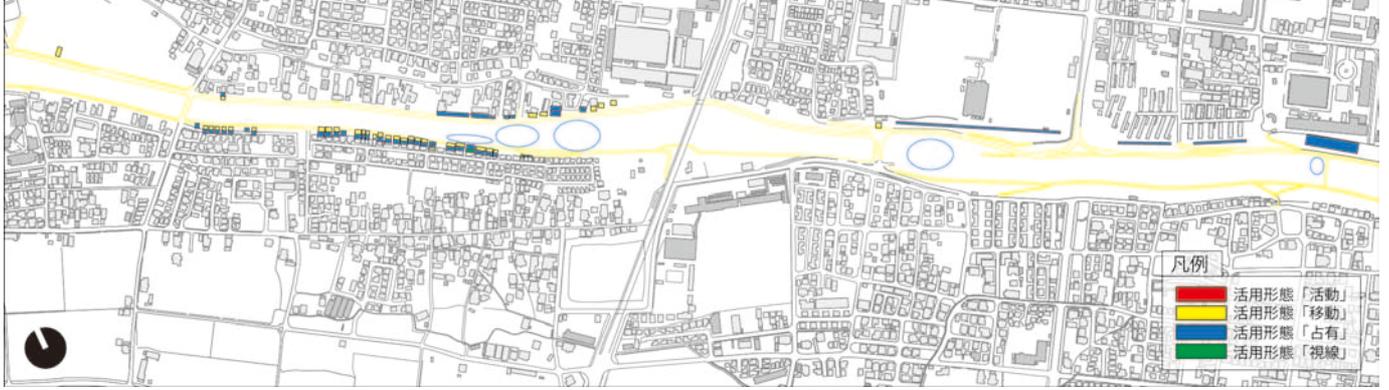


Fig.8 活用形態毎の公共的活用-区間 3-

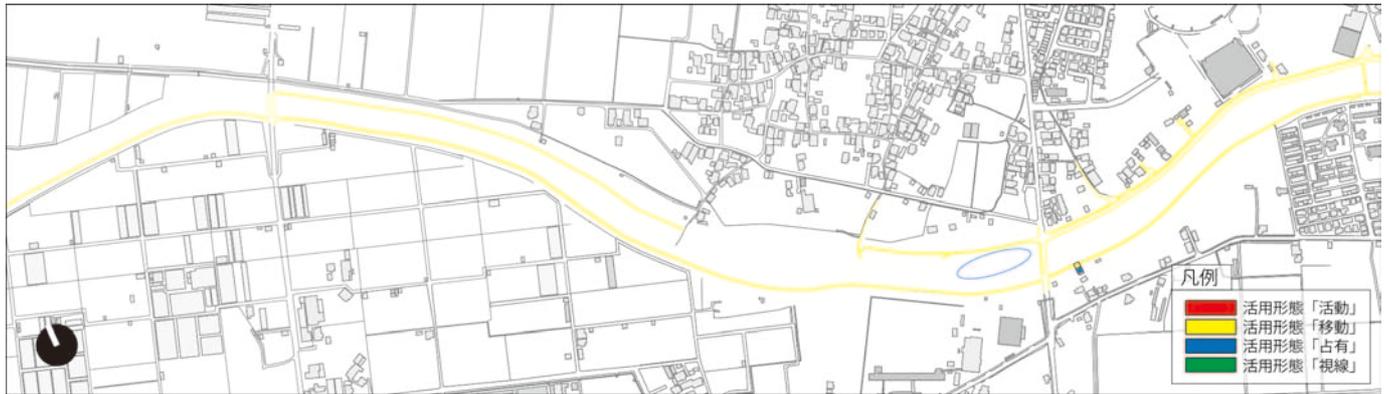


Fig.10 活用形態毎の公共的活用-区間 2-

### 5.3. 公共的活用の配置状況における特徴

#### ■15 に分類したグループ事例毎の特徴

グループ事例 B・C・D・E・L は区間 1～区間 4 に渡って広い範囲で確認出来る。このことにより、旧草津川が広い範囲に渡って交通路としての役割を担っていることが窺える。

グループ事例 F とグループ事例 G は 78 件と 80 件と特に多く発見されたグループ事例である。堤防との間に道などがなく、堤防と接している住戸という条件下においては、両方のグループ事例が、ほとんどの場合に発見された。また、堤防沿いに住戸が密集している場所では多々観察されるが、数件だけまばらにあるような場所ではあまり観察されなかった。近隣で活用が活発な場合に、より活用が促されることが窺える。グループ事例 F とグループ事例 G は、同じ場所で対になって観察されることが多く、堤防上道路が車道である所よりも、歩道に面している所の方が多ことが分かった。

グループ事例 H は、兩岸の堤防跡に挟まれた河床跡部分で多く観察されることが分かった。

グループ事例 K は、旧草津川がカーブして堤防上部分が大きくなっている部分を利用してつくられている。

グループ事例 L は、草津市市街地の道路状況に対応しているのではなく、旧草津川跡に対して、等間隔にかかっていることが分かる。また、グループ事例 E は、グループ事例 L がある所には、必ず存在している。

グループ事例 O は、住戸が多い区間 3 と区間 4 にかたまってみられ、堤防跡に囲まれた河床部分で多く観察される。

#### ■活用形態毎の特徴

活用形態「活動」の事例は、兩岸の堤防跡に囲まれた河床部分で多く見られる。また、人口密度の高い区間である区間 3 と区間 4 でのみ発見された。

活用形態「移動」の事例は、区間 1 から区間 4 までの区間でも発見された。すべての区間で発見さ

れた活用形態はこの「移動」の事例だけである。このことから、活用形態「移動」は、旧草津川において活発に利用されていることが窺え、草津市の人口密度に関係なくなされている活用だと言える。

活用形態「占有」の事例は、特に区間 3 と区間 4 に多く観察された。堤防跡沿いや河床跡に広く観察された。特に、堤防跡の周辺建築物と接している斜面に広く見られた。

活用形態「視線」は、区間 3 でのみ一つの事例が観察された。この活用形態「視線」による、活用は、旧草津川ではあまりなされていなどと言える。

### 6. 結論

本論文では、旧草津川で行われている公共活用を調査した。そこで、161 件の対象事例を発見し、それらを整理・分析した。そこから解明したことを以下にまとめる。

- ・同一の活動や構築物毎にグループをつくると、A～O の 15 のグループに分けることが出来た。
- ・それらのグループ事例を分析することにより、旧草津川が活発に公共利用されている要因として、「有機性」・「連続性」・「遮蔽性」・「レベル差」という 4 つの「公共性獲得要因」を抽出した。
- ・「公共性獲得要因」のグループ毎の分布を図示し、事例グループと公共性獲得要因の関係性「公共性獲得要因」の相互の関係性を示した。
- ・対象事例を①ある特定の空間を「占有している」か「占有していない」か、その活用は、「一時的な活用」か「継続的な活用」かという 2 つの観点で「活動」「移動」「占有」「視線」という 4 つの活用形態に分類し、示した。
- ・これらの活用形態の分類と 4 つの「公共性獲得要因」を照らし合わせたものを図示することにより、それぞれの「公共性獲得要因」はどのような活用形態に結びついているのかを示した。
- ・グループ毎の事例と活用形態に分類した事例の配置図状況を図示・分析することを通して、旧草津川における公共的活用の特徴を解明した。

## 討議

1  
2  
3 討議 [ 徳尾野徹 先生 ]  
4 公共的活用と言っているが、「公共性」とはどのような  
5 に定義しているのか

### 回答

7 公共性の定義としては、齋藤純一の『公共性』（岩波  
8 書店）から引用し「誰もがアクセスすることを拒まれ  
9 ない空間や情報」として定義しています。旧草津川は  
10 周辺住民に活発に利用されているという事実から、旧  
11 草津川は公共性を有しているとし、そこでの旧草津川  
12 の利用を公共的活用と称しています。 60

13 空行 61

14 空行 62

15 討議 [ 徳尾野徹 先生 ] 63

16 調査はどのように行ったのか。 64

### 回答

18 旧草津川において、行われている行為や起こってい  
19 る現象を対象とするために、実際に旧草津川を歩き、  
20 調査しました。 68

21 その際、 69

22 旧草津川の敷地内における構築物 70

23 旧草津川の敷地内における人による活動 71

24 の2種を調査対象として、すべてチェックし、地図上  
25 にプロットしました。 73

26 空行 74

27 空行

28 討議 [ 佐久間康富 先生 ]

29 それぞれの活動どうしの関係性はどのように示せて  
30 いるのか。

31 それぞれの活動が起こりやすい場所を示せるような  
32 ポテンシャルマップのようなものがあればよかったの  
33 ではないか。

34 そのようなマップは今回無いにせよ、どのような場  
35 所でどのような活動が起こり易いなど何か分かったこ  
36 とはありますか。

### 回答

38 活用形態「活動」は河床部分で多いということや、  
39 「移動」は堤防跡地上部部分を利用しているというこ  
40 と、また人口密度と関係なく広く見られるということ  
41 など分析により分かったことは（プレゼンテーション  
42 の際にパワポに載せている）表にまとめています。

43

44

45 討議 [ 嘉名光市 先生 ]

46 天井川からスタートしているが、天井川の形態は残  
47 したいのか。

48 あなたの見解はどうなっていますか。

## 回答

50 今回の調査によって、天井川の形態が持つ良い点を  
51 多々発見しましたが、北南の移動の障壁となっている  
52 ことなど問題点があることも確かです。

53 今のままでそのまま残すのには無理がありますが、  
54 現在の政策に従って全くの平地にするのではなく、天  
55 井川跡地の持つ良い部分を残せるように、手を加えつ  
56 つ残すのが良策だと思っています。

本研究は、そのことを示すための研究でもあります。